

大丈夫！

[ヨハネの手紙一 5章 1～15節]

イエスがメシアであると信じる人は皆、神から生まれた者です。そして、生んでくださった方を愛する人は皆、その方から生まれた者をも愛します。このことから明らかのように、わたしたちが神を愛し、その掟を守るときはいつも、神の子供たちを愛します。神を愛するとは、神の掟を守ることです。神の掟は難しいものではありません。神から生まれた人は皆、世に打ち勝つからです。世に打ち勝つ勝利、それはわたしたちの信仰です。だれが世に打ち勝つか。イエスが神の子であると信じる者ではありませんか。この方は、水と血を通して来られた方、イエス・キリストです。水だけではなく、水と血とによって来られたのです。そして、“霊”はこのことを証しする方です。“霊”は真理だからです。証しするのは三者で、“霊”と水と血です。この三者は一致しています。わたしたちが人の証しを受け入れるのであれば、神の証しは更にまさっています。神が御子についてなされた証し、これが神の証しだからです。神の子を信じる人は、自分の内にこの証しがあり、神を信じない人は、神が御子についてなされた証しを信じていないため、神を偽り者にしてしまっています。その証しとは、神が永遠の命をわたしたちに与えられたこと、そして、この命が御子の内にあるということです。御子と結ばれている人にはこの命があり、神の子と結ばれていない人にはこの命がありません。神の子の名を信じているあなたがたに、これらのことを書き送るのは、永遠の命を得ていることを悟らせたいからです。何事でも神の御心に適うことをわたしたちが願うなら、神は聞き入れてくださる。これが神に対するわたしたちの確信です。わたしたちは、願い事は何でも聞き入れてくださるといことが分かるなら、神に願ったことは既になえられていることも分かります。

[1] まっすぐに神さまの愛が届けられるために

新約聖書のヨハネの手紙一と一緒に読む最後です。『聖書教育』誌の今日の所を読んでいて、幼小科のページで書かれている文がとても分かりやすく、また本質を突いているなあと思いました。こういう文章です。

「今、私たちは離れた場所にいる友達に大切なことを伝えようと思った時、どうやって伝えているのでしょうか？ 電話やメールを使う人が多いと思います。手紙で伝えることもできます。切手を貼ってポストに投函すると、郵便屋さんが届けてくれます。ヨハネが手紙を書いたころ、手紙はどうやって届けられたのでしょうか。もちろん電話もメールもありません。書いた手紙はきっと、人から人へと手

渡されて届けられたのでしょうか。とっても大変なことですが、それでもヨハネは教会の人たちを励まし、＜真実の神、永遠の命＞であるイエス・キリストを伝えるため、手紙を書きました。その手紙は教会の人たちに届けられました。そして今も、こうやって大切なみことばが私たちに届けられているのです」。

本当にそうだと思います。

この6月までは、この幼小科は、明上山（あけがみやま）美樹さんという方が担当しておられました。目黒区の恵泉教会のメンバーの方のようです。執筆者紹介の自己紹介の文もとても良いのですね。—「絶対無理—！と書いていたのですが、…今回本当に貴重な経験をさせて頂けたことに感謝します。どうしたら子どもたちにみことばが伝えられるかと思いながら、何度も何度も聖書を読み、幼稚園や教会の子どもたちの顔を思い浮かべながら執筆させて頂きました。まっすぐに神さまの愛が届けられることを祈っています」と。

「まっすぐに神さまの愛が届けられることを祈っています」と。結局私たちが教会でしていることはこれですよね。だから教会は色々なことがありますけれども、いつでもみことばが中心なんです。私たちが証しをする時もみ言葉との関わりというのが大事ですよね。明上山さんが「何度も何度も聖書を読み、幼稚園や教会の子どもたちの顔を思い浮かべながら…」と書いておられました。私たちがそれをしたかったと思います。礼拝の、み言葉の朗読の後の黙想の時もその一つです。

[2] 愛は、イエス・キリストの中に

ヨハネの手紙一は、愛の手紙とよく言われます。今日交読で読んだパウロのコリントの信徒への手紙一の13章も、愛そのものを語った手紙と言われ、とても有名ですが、それに並ぶものがヨハネの手紙一です。でもこの手紙は、愛一般を語ってはいません。「神は愛である」(4:16)と語ります。また、「愛は神から出るもの」(4:7)とも語ります。先週の週報の巻頭言で書かせて頂いたことを覚えているでしょうか？ もう忘れていませんか？ 私も忘れていました。でも昨日もう一度読んで、あれ、結構いいこと書いているじゃない？ と思いました(笑)。そこで私は、「愛が神なのではなく、神様が愛なのです」と書きました。そして、「信仰」「希望」「愛」はいつまでも残るとパウロは言いますが、同時に「最も大いなるものは愛」とも言う訳です。それ何故だろう？ と考えました。私なりに思ったことは「信仰」も「希望」も人間が抱くものだけれども、「愛」だけは神様から来るものだからではないか、ということでした。

そして、この「愛」というのは、イエス・キリストの事実ということと分けることが出来ないということを経4章までの所で語っていたわけ。この当時(紀

元1世紀)は、イエス・キリストに対する理解については、様々な捉え方があって、教会の共同体を惑わすようなことがずいぶんあったようです。そういう者たちに対してヨハネは、彼らを**偽預言者**と言い、彼らは教会を分裂させるけれども、私たちは互いに愛し合ひましょう、愛は真の神様から出ているのですから、愛し合うことで私たちはこの世に神様を証しすることになるのだと語っていると思います。ですから他の所では「**愛には恐れがない**」(4:18)と言っていますし、4:21では、「**神を愛する人は、兄弟をも愛すべきです。これが、神から受けた掟です**」と言っています。

今日の所でも「**神の掟**」という言葉が出てきます。「掟」というとどこか冷たい響きを感じますが、そうではなくて、これは人間が作ったものではなく、神様が作って下さった**法則**と言いますか、**ものさし(メジャー)**だと思います。繰り返しますが、神様が作って下さったものです。私たち人間が安心して生きることが出来るためのものとしてです。そして、この愛の出所をしっかりと押えておくようにというのですね。その出所とは、あの、**人となられたイエス・キリスト**です。

[3] 水だけでなく、血によってこられた方イエス

5:5~6 節をもう一度お読みします。「**だれが世に打ち勝つか。イエスが神の子であると信じる者ではありませんか。この方は、水と血を通して来られた方、イエス・キリストです。水だけではなく、水と血とによって来られたのです。そして、“霊”はこのことを証しする方です。**」—少しわかりづらい文章ですね。特に「**このお方(イエス)は、水と血を通して来た**」というのがどういうこと?と思うと思います。これは、当時の**ドケティズム(仮現論)**という異端的考えへの反証だということです。

このドケティズム(仮現論)はどういうことを主張するかと言うと、キリストはただ人間であるように見えるだけで、**受肉**などということはないのだと言うのです。仮に人間のように見えているから仮現説(論)なのです。その代表的な主張者に**ケリントス**という人がいました。1世紀の終わり頃エペソ周辺にいたらしいです。ケリントスによると、イエスとキリストは二つの別個の存在であって、キリストは天的な力であり、その天的な力は、彼の**バプテスマ**の時にイエスの上に降って、**十字架の出来事**の直前にイエスから離れたとされています。あのような死に方をしたのはもはや神ではないということなのではないでしょうか?

ですからこの手紙でヨハネは、ケリントス派の人々に対し、「**このイエスは水＝バプテスマと、血＝すなわち十字架とを通して来られた**」お方であるのだと語っています。水だけではなく、血、つまり十字架というのは、神様が人間をどれだけ愛しているかの証なのだ、それもまた天的な出来事なのだと言っているのです。そ

してそのことを霊＝聖霊が証してくれている、と言うのです。6 節の後半から、「“霊”は真理だからです。証しするのは三者で、“霊”と水と血です。この三者は一致しています。」とありますね。“霊”と水と血。これは、イエス・キリストという方において一つだと言っているのですね。「霊(聖霊)」も、イエス・キリストと切り離しては考えられないということです。

[4] 信仰者の確かさ

そして、「神の証し」という言葉 9 節の中に 2 度出てきますね。これは、私は神の太鼓判と言い換えてもいい事だと思いました。「神が御子についてなされた証し、これが神の証しだからです」。ちょっとびっくりしませんか？ この言葉は聖書全体の中でもとても大胆な宣言だと思います。

これは言い換えれば、主イエスのおかげであなたはもう大丈夫だ！という、言わば神様の公文書に、神様が十字架の血をもって判子を押して下さったようなものです！ あなたはイエス様の十字架の故にもう大丈夫だ。私たちの人生は、私たちの命は、神に愛されている。コロナがあろうがなかろうが恐れるな。最終的にあなたは私の手の中にある。

聖書が何故今の時代にも印刷され、私たちの手元に届けられているのか？—これが、神様の言葉だからです。「神の言葉は(鎖に)つながれていない」とテモテへの手紙二 2:9 の中にありますけれども、誰もこれは押さえつけることは出来ないのですね。イエス様も「石が叫ぶであろう」と言いましたけれども、神様を信じ、イエスに依り頼み、既に天に召されていった信仰の先達たちの生きざまも、神様の愛が真実であったと証してくれているのです。

ヨハネが私たちに伝えたいこと、今日は最後に 13～15 節の神様のお約束に心を留めたいと思います。どんな人生の局面に立たされる時も、イエスさまこそ私の救い主だと依り頼んで裏切られることはないのだ、既に「愛には恐れはない。完全な愛は恐れを取り除く」と言われている、ある意味不思議な「信仰」という旅路をご一緒に歩んで行きたいと思います。13～15 節です。

「神の子の名を信じているあなたがたに、これらのことを書き送るのは、永遠の命を得ていることを悟らせたいからです。何事でも神の御心に適うことをわたしたちが願うなら、神は聞き入れてくださる。これが神に対するわたしたちの確信です。わたしたちは、願い事は何でも聞き入れてくださるということが分かるなら、神に願ったことは既になんかえられていることも分かります。」

お祈り致します。